

石川県立美術館だより

平成18年10月1日発行 第276号

人間国宝制度誕生50年 漆芸界の巨匠

人間国宝

松田権六の世界

9月29日(金)～10月29日(日) 会期中無休
毎週土曜日は午後8時まで開館



蓬萊之棚 松田権六 (撮影 大堀一彦)

卒寿記念 人間国宝 大場松魚展

9月28日(木)～11月12日(日) 会期中無休



平文南飛の箱 大場松魚

目次

松田権六の世界.....	2	映像ギャラリー、鑑賞ファイル7	6
大場松魚展.....	3	図書閲覧室NOW、行事案内	7
加賀藩の美術工芸	3	美術館の本	7
加賀文化の華.....	4	所蔵品紹介	8
主な展示作品.....	5	ミュージアムショップ通信	8

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

企画展示室(第7~9展示室)

人間国宝制度誕生50年 漆芸界の巨匠

人間国宝 松田権六の世界

9月29日(金)~10月29日(日) 会期中無休

主催 / 石川県立美術館



松田権六(撮影 大堀一彦)

本年は、「漆ニジャパン」に生涯を捧げた漆芸界の巨匠 松田権六の生誕一〇〇年、没後二十年にあたります。さらに松田自身が認定第一号となった、いわゆる人間国宝の制度が誕生してまる五十年を経過した節目の年でもあることから、本館では十九年ぶりに大規模な松田権六の展覧会を開催し、伝統工芸の本質を再考したいと思えます。

展覧会は三部の構成となります。まず第一部は、初期の『蒔絵福寿草文小盆』(一九一二年作 東京国立近代美術館蔵)から晩年の『牡丹文蒔絵盤』(一九八四年作 金沢市立中村記念館蔵)に至る松田の創作の軌跡を約七十点によってたどりま。

第一部でまず注目されるのは、松田は初期から加賀蒔絵の伝統を踏まえた卓越した技量を発揮していたことです。しかし松田はそこにどまらず、徹底した古典研究によって終生自己研鑽に励みます。東京美術学校の卒業制作である『草花鳥獸文小手箱』(東京藝術

大学蔵)では松田一流の「趣向の美学」が駆使されており、それはさらに洗練されて『蓬萊之柵』(本館蔵)や『鴛鴦蒔絵棗』に継承されていきます。松竹梅と鶴亀という主題で竹と亀はなぜ明確に意匠化されていないか。また通常はつがいで描かれる鴛鴦で、なぜ雄のみが描かれているのか。ぜひ展示室で松田のエピソードとともにその深い訳



草花鳥獸文小手箱 東京藝術大学蔵

を納得していただきたいと思えます。また正倉院や中尊寺の調査や修復をとおして、奈良から平安時代の意匠感覚を自己のものとし、それを巧みに現代風に翻案している手腕も作品の大きな見所といえます。

第二部では、松田権六の芸術観の形成という視点から、漢時代の楽浪郡出土の漆器をはじめ、松田が実際修復した文化財や、松田のルーツともいえる五十嵐派、尾形光琳の作品。そして松田の師である六角紫水や白山松哉などあわせて約三十点を展示します。

松田は人に学ぶ、物に学ぶ、自然に学ぶをモットーとしていましたが、ここでは特に物と人にスポットを当て、松田の研究の軌跡をたどりま。今回は、東京大学考古学研究室の御厚意によって、ほとんど見ることができない楽浪漆器六点が展示されるほか、松田が美の恩師と仰いだ益田鈍翁旧蔵で、松田の銘文解説の苦心が後世の語りぐさとなった重要文化財『住吉蒔絵唐櫃』(東京国立博物館蔵

十月十五日まで展示)も必見の名品です。第三部は、松田権六の美の継承者という視点で、松田に直接師事、あるいは薫陶を受けた人間国宝九氏の作品約四十点を展示します。作家の顔ぶれは、寺井直次、大場松魚、田口善国、前史雄、川北良造、小森邦衛、赤地友哉、塩多慶四郎、氷見晃堂の各氏で、松田芸術がどのように継承され、また新たな作風に転換されていったかを、作家自身の言葉も交えながら紹介します。

そして十月一日の本館館長による講演会、同十五日の人間国宝三氏を交えた座談会など関連催事にもぜひご来場ください。



住吉蒔絵唐櫃 東京国立博物館蔵

10月8日からの毎週日曜日午前11時からギャラリートークを行います。

観覧料(2階コレクション展示室もご覧になれます。)

個人	団体(20名以上)
一般 1,000円	一般 800円
大学生 600円	大学生 400円
高中小生 300円	高中小生 200円

当館友の会員は受付での会員証提示により、団体料金になります。

企画展示室(第5展示室)

特別陳列

卒寿記念 人間国宝 大場松魚展

9月28日(木)~11月12日(日) 会期中無休

現代漆芸界の巨匠である、重要無形文化財保持者(人間国宝)大場松魚氏は卒寿を迎えられました。大正五年、祖父の代より続く塗師師の家に生まれた大場氏は、石川県立工業学校(現在の石川県立工業高校)図案科を卒業した後、父宗秀について漆の基礎を修得します。その後、昭和十八年第二次世界大戦の最中、東京に出て活躍していた金沢出身の漆芸家松田権六氏に指導を受け、二年後、再び故郷である金沢に戻り、作家として本格的に活動を始めます。蒔絵、特に当時あまり行われていなかった平文技法を探求・再興し、気品あふれる格調高い漆芸世界を築き、昭和五十七年に蒔絵で重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されます。

こうした制作活動の一方で、保持者は、その卓越した貴重な技を保存し、伝承する重要な責務を担っています。大場氏には多くの内弟子がいましたが、「弟子たちは互いに自立していかなければならない」という考えから、新作の個展においては、大場氏の作品のみならず、弟子たちの作品を展示し、互いに研鑽し合う場をもつけました。これが「一門展」の走りとなり、以後、多くの会員たちが腕を磨き、活躍しています。この他、昭和五十二年より金沢美術工芸大学教授として、また、石川県立輪島漆芸技術研修所では講師と

してばかりでなく所長も勤めるなど、各教育機関においても、後進の育成に尽力されており、その指導力も高く評価されています。

本展は大場氏の日展・日本伝統工芸展に出展した作品を中心に、氏に師事し、氏の精神を受け継ぎ活躍している、小柳種圃・中野孝一・向井武志・砺波宗斎・市島桜魚の五名の作家の作品を含め、四十六点を一堂に展示し、そこに流れる、その技術と精神をご覧いただくとするものです。

なかでも、今回の見どころは現在までに大場氏が制作された十の棚の全てを企画展「人間国宝 松田権六の世界 第三部 美の継承者たち」(第九展示室)とこの特別陳列(第五展示室)とにまたがったのかたちとなりますが、全作品展示いたします。心ゆくまでどうぞ御覧下さい。

「平文棚」

「平文千羽鶴の棚」(第九展示室)

「平文三友の棚」

「平文三彩の棚」

「平文南飛の棚」

「平文薄の棚」(第九展示室)

「平文芳苑の棚」

「平文相生の棚」

「平文光輪棚」

「平文富士光々之棚」



平文光輪棚 平成2年



平文棚 昭和29年

今月のコレクション展示室 (前田育徳会展示室) 加賀藩の美術工芸 (第2展示室) 加賀文化の華

9月28日(木)~11月12日(日) 会期中無休

加賀藩前田家は、初代利家から歴代藩主が文化事業に深い関心を寄せています。なかでも三代利常は傑出した文化大名です。外様大名という立場から幕府への政治的屈従を強いられた利常が、天下一大名を誇示するための唯一の方法は、自己の文化政策による反体制的姿勢の表明でした。

利常は、後水尾天皇や小堀遠州などとの交流も深く、その影響を強く受け、日本文化の原点である平安王朝文化の世界ともいふべき内容の名品収集や、茶道具の収集、また一方では海外の文物にも目を向け、長崎を窓口として舶載される貴重な名物裂や陶磁器類などを購入、さらには東インド会社を通じてのオランダ・デルフト陶への注文、そして次には、豪放華麗な色絵を特徴とする古九谷の操業へと発展します。このように利常の美意識には、他のいかなる大名の追隨をも許さないスケールの大きさがありました。

当初、武器や武具の制作・修理を行っていた細工所は、利常の代に前田家の生活調度、いわゆる大名道具を中心とする美術工芸品を制作するところに改められ、五代綱紀の代にさらに整備・拡充されました。漆芸では時絵の五十嵐道甫を京都から、清水九兵衛を江戸から、あるいは金工では京都から後藤顕乘を招き、高禄をもって召し抱えて、細工所の指導者として後継者の育成に力を注ぎ、また今日伝えられる名品の数々の制作にあたらせました。このようにして招かれた名工の指導のもとに、加賀藩の美術工芸は、江戸や京都に肩を並べる水準の高いものとなりました。

五代綱紀は父の四代光高が早世したため、幼少の頃より祖父利常の強い影響を受けて養育されました。利常同様優れた美術工芸品を収集すると同時に、手に入らないものは写本や模造品を作成し、それらを整理分類するという、今日的な意味での図書館、博物館的な事業を行っている事が特徴です。「尊經閣蔵書」として伝えられる、和・漢・韓にわたる貴重な文書・典籍類はあらゆる分野にまで及び、まさに天下一の文書・典籍のコレクションです。

このような二大特色を端的に紹介するのが、毎年恒例の「尊經閣文庫名品展」であり、「加賀藩の美術工芸」です。

今回は、同時に開催する当館主催の企画展「人間国宝 松田権六の世界」や特別陳列「卒寿記念 人間国宝 大場松魚展」にあわせて、加賀時絵を中心とした漆芸作品に焦点を当てた展示内容としました。

今日の石川県は工芸王国といわれ、毎年開催される「日本伝統工芸展」の都道府県別の

入賞者は、常にトップを争っています。その層の厚さやレベルの高さは、江戸時代に加賀藩の文化政策によって見事に花開いた加賀時絵の存在があるからです。

「前田育徳会展示室」では、「屏風時絵冊子箱(国宝・土佐日記の箱)」などの漆芸品を十八点、「第二展示室」では、重要文化財「時絵和歌の浦図見台」などの漆芸品を十五点展示しますので、「人間国宝 松田権六の世界」や「卒寿記念 人間国宝 大場松魚展」と合わせてご鑑賞いただくことで、江戸時代から今日へと受け継がれた美の世界をご堪能いただけると思います。さらには、前田家によって収集された絵画や工芸品などの国宝や重要文化財を含む「加賀文化の華」を展示しますので、奥深い日本文化に親しんでいただければ幸いです。

なお、さる七月十六日の『新日曜美術館』で紹介された「四季耕作図屏風」(久隅守景筆)をアンコール展示しますので合わせてお楽しみ下さい。

時絵和歌の浦図見台 伝清水九兵衛



時絵扇面夕顔図小硯箱
五十嵐様式



時絵菊慈童図葉籠箱
伝五十嵐道甫

今月のコレクション展示室 主な展示作品

9月28日(金)～11月12日(日)

= 国宝 = 重要文化財 = 石川県指定文化財



蒔絵廠浪図硯箱
伝五十嵐道甫

前田育徳会展示室

特集 加賀藩の美術工芸

四季山水図屏風
屏風蒔絵冊子箱(国宝・土佐日記の箱)
蓮蒔絵箱(職人歌合絵巻の箱)
真鳥羽入筆筒
清水九兵衛
後藤家装剣小道具第四号
四代光乘(光家)

伝周文

第1展示室

色絵雉香炉
色絵雌雉香炉
野々村仁清
野々村仁清
(両作品とも貸し出しのため不在の期間があります。詳細は6ページをご覧ください。)

第2展示室

特集 加賀文化の華

剣 銘吉光
白山比咩神社蔵
蒔絵和歌の浦図見台
伝清水九兵衛
蒔絵歌書筆筒
伝五十嵐道甫
色絵百花散双鳥図平鉢
古九谷
青手桜花散文平鉢
古九谷

第3・4展示室

【日本画】
寄港
坂根克介
黄樹のある風景
下村正一
山の秋
玉井敬泉
北風の浜
平桜和正
【彫塑】
昇華
石田康夫
女(ポニーテール)
久遠
木村直久
木村珪二

第3・4展示室

【油彩画】
望郷を歌う(故高英洋に)
鴨居 玲
パラダイス
清水鍊徳
シヨールをまとう
竹沢 基
舞台裏
南 政善
睡眠術(振り)
吉田富士夫

第5展示室

特別陳列 卒寿記念 人間国宝 大場松魚展
漆芸扇風器
大場松魚
平文梅盤
大場松魚
平文小筆筒
大場松魚
平文朝箱
大場松魚
平文富士日月盤
大場松魚

第6展示室

【染織】
友禅訪問着「魚のむれ」
木村雨山
【陶磁】
耀彩鉢「極光」
三代徳田八十吉
【日本画】
残照
西山英雄
【油彩画】
アラブの旅
高光一也
熱叢夢
宮本三郎
【彫塑】
人魚
松田尚之

観覧料

一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円	人	大学生 220円	
高校生以下は 無料		高校生以下は 無料	



北風の浜
平桜和正



人魚
松田尚之



熱叢夢
宮本三郎

美術館からのお知らせ

国宝の「色絵雉香炉」と重要文化財の「色絵雌雉香炉」が貸し出しのため、下記のとおり不在になります。予めご了承下さい。

◆不在の期間

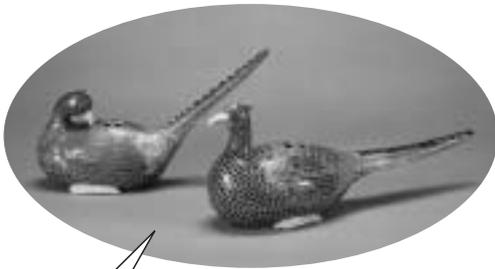
色絵雉香炉 野々村仁清作
11月16日～27日
色絵雌雉香炉 野々村仁清作
10月12日～11月15日

◆出品展覧会名

「京焼 - みやこの意匠とわざ - 」

◆主催・会場

京都国立博物館



しばらく留守にします

映像ギャラリー

10月8日(日) ビデオ鑑賞会
「石川の匠たち 和光 大場松魚」 (29分)
「石川の匠たち 極光 寺井直次」 (25分)
10月22日(日) ビデオ鑑賞会
「北陸の工芸作家 石川の匠たち」 (50分)
10月29日(日) 月例映画会
「金沢漆器」 (29分)
「山中漆器」 (29分)
いずれも入場無料

今回は、上記の内容で行います。

このうち、「石川の匠たち 和光 大場松魚」は、金、銀の薄板を文様に切り、器物に加飾する方法である平文の技法を駆使して、華麗な作品を制作する人間国宝・大場松魚氏を紹介するものです。

また、「石川の匠たち 極光 寺井直次」は、鶉などの卵の殻の美しい部分を選んで細かく割り、文様にそって貼り付ける方法である、卵殻の技法で注目された人間国宝・寺井直次氏を紹介するものです。

「北陸の工芸作家 石川の匠たち」は、工芸王国・石川を代表する作家たち、陶芸の浅蔵五十吉・大樋長左衛門・徳田八十吉、漆芸の大場松魚・寺井直次・塩多慶四郎、木工の川北良造、刀剣の隅谷正峯といった、人間国宝や芸術院会員の工芸作家各氏を紹介しています。

「金沢漆器」は、用途に応じてイチヨウの原木を切断し、荒削りをしたあと漆塗りが行われ、最後に蒔絵の繊細な作業をほどこす経過が、丁寧にとらえられています。

瀟洒なかたちと鮮麗な花塗を特色とする「山中漆器」は、時間をかけて乾燥させた堅い木に、千筋挽き、塗り、研ぎ、蒔絵などを行う地方色豊かな工芸技術による製造過程と、作品を紹介しています。

鑑賞ファイル No.7

漆芸品

漆の木から採取される天然の塗料を用いて、さまざまな技法を凝らし、作り上げられるのが漆芸品です。乾いていない状態での漆の毒性によるかぶれや、紫外線による劣化などの短所はありますが、木製品をそのまま用いるよりも、水や熱、薬品等への耐性が高くなり、用途が広がります。また漆の接着力を利用した華やかな装飾や、漆そのもののしっとりとした深い光沢の美しさは、他に類を見ないものです。

日本における漆工の歴史は、中国と並んで非常に古い時代から続いており、英語で漆のことを“japan”と称されるほど、日本の漆芸品とその技術は世界的に知られています。6,000年以上前の縄文時代の遺跡の中に、漆を塗料として用いた土器が出土していること、また法隆寺の



蒔絵螺鈿秋月野景図硯箱
伝五十嵐道甫

玉虫厨子のように1,400年もの時を経て、今日まで保存された例もあり、日常に使う道具から特別な調度まで、漆芸品が幅広く用いられていたことが分かります。

繊細で叙情的な表現を好む日本では、漆で描いた文様の上に、金や銀といった金属粉などを蒔きつけて光り輝かせる「蒔絵」という加飾の技法が発達しました。石川県では江戸時代に、加賀藩三代藩主前田利常が、京都や江戸より五十嵐道甫や清水九兵衛といった名工を招いて、職人を育成したことにより、加賀蒔絵の伝統が育まれました。そのため現在に至るまで、漆芸の盛んな土地としてよく知られており、優れた漆芸作家を何人も輩出しています。

図書閲覧室NOW

今回は、企画展示室で開催される「人間国宝 松田権六の世界」、またコレクション展示室で開催される「卒寿記念 大場松魚展」にちなんで、関連の書籍をご紹介します。

○『うるしのつや』日本経済新聞社（1981）

この本は、松田氏がその半生を回顧した日本経済新聞連載の「私の履歴書」を、加筆訂正して上梓されたものです。漆芸のみならず、古美術に深い造詣を持っていた松田氏の、古今東西にわたる味わい深い回顧談が展開され、読者を魅了していきます。

○『松田権六展』日本経済新聞社（1987）

松田芸術の全貌を紹介した展覧会の図録です。展示は、松田氏の初期から最晩年の作品までをほぼ網羅し、参考資料等も含めて約140点の充実した回顧展でした。ちなみに同展は、当館と東京有楽町アートフォーラムにおいて開催され、多大の反響を呼びました。

○『週刊朝日百科 人間国宝4 高野松山・松田権六』

朝日新聞社（2006）

本年から刊行が開始された、人間国宝シリーズの中の1冊です。本号では、松田氏の代表作をとりあげ、そのすぐれた技をビジュアルに紹介しています。特に生前、親交のあった当館の嶋崎館長が、松田芸術の特徴に加え、当館所蔵の「蓬萊之棚」について、その見どころを簡潔に紹介しており、作品鑑賞のよき手引きとなると思われます。

◇『古稀記念 大場松魚展』高島屋（1986）

◇『喜寿記念 大場松魚漆芸展』西武百貨店（1993）

◇『傘寿 大場松魚展』松坂屋（1995）

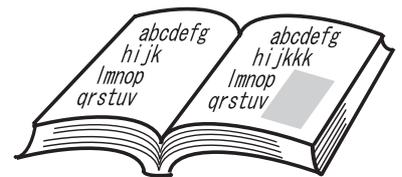
大場氏の、それぞれの記念の年に開催された展覧会の図録です。これらを一覧すれば、円熟したその高い技術がうかがうことができます。

紹介した本は、当館の図書閲覧室で閲覧できます。館外の貸し出し、コピーサービスは行っておりません。開室時間は午前9時30分～午後4時30分。

美術館の本

石川県立美術館 所蔵品図録	3,500円	隅谷正峯展	2,000円
九谷名品図録	2,000円	寺井直次の世界	2,000円
石川県の工芸	2,000円	工芸作品と図案	2,000円
大樋長左衛門 の世界	2,200円		

※ミュージアムショップにて
お求めいただけます。



10月の行事案内 《入場無料(ギャラリートークを除く)・いずれも午後1時30分から行います》

月 日	行 事	内 容	会 場
10/ 1(日)	講演会	松田権六の世界 (嶋崎 丞当館館長)	ホール
10/ 7(土)	キッズ 鑑賞講座	大場松魚展を鑑賞しよう (西ゆう子学芸主任)	講義室
10/ 8(日)	銅羅の音鑑賞会	第1回 午前10時30分 人間国宝 初代魚住為楽氏制作の銅羅 第2回 午後 3 時	第6展示室
10/ 8(日)	ビデオ鑑賞会	石川の匠たち 和光 人間国宝 大場松魚 (29分) 石川の匠たち 極光 人間国宝 寺井直次 (25分)	ホール
10/14(土)	美術講座	松田権六の美学 (村瀬博春学芸専門員)	講義室
10/15(日)	座談会	人間国宝 松田権六を語る(川北良造氏、前史雄氏、小森邦衛氏の人間国宝各氏 司会：嶋崎 丞当館館長)	ホール
10/21(土)	美術講座	加賀文化 展示室での解説も併せて行います(要観覧料)(高嶋清栄学芸専門員)	講義室・展示室
10/22(日)	ビデオ鑑賞会	北陸の工芸作家 石川の匠たち 浅蔵五十吉、大場松魚、大樋長左衛門、川北良造、 塩田慶四郎、寺井直次、徳田八十吉(50分)	ホール
10/29(日)	月例映画会	金沢漆器 山中漆器 (ともに29分)	ホール

京都日本画壇の重鎮であった作者は、東の杉山寧、東山魁夷、高山辰雄らと並んで日展の四山と謳われました。豪快で秀麗な大自然を描き続けた作者ですが、とりわけ、三十代後半からの山々を描いた作品群は「豪胆」「剛毅」「豊麗」と賞賛されています。作者のその制作姿勢や作品に対して、井上靖も「対象の持っている生命に直接体当たりしているようなところがある」と評しています。中でも、昭和55年の阿蘇嵐や56年の火焰山（ともに本館蔵）は円熟期の一つの到達点とも評される作品です。どっしりとした量感を持ち、卓抜な色彩感覚で描かれた大自然は、厳しくも豊かな風格をそなえています。

今回紹介の阿蘇を題材にした3枚の素描もこの時期に描かれたものです。単に「山をスケッチした」ということにとどまらず、その一枚一枚は、まさに阿蘇に体当たりし、阿蘇からうけた生命の息吹をそのまま素直に、豪放且つ繊細に描いています。岩絵の具で描いた本画もさることながら、素描では唸るような筆致から、大自然と対峙した作者の鼓動が感じられるのではないのでしょうか。朝から日が暮れるまで、精力的に「まるで機関車のようにスケッチをしていた」といわれる作者の姿がうかがえます。

明治44年京都市に生まれた作者は、14歳で叔父の西山翠嶂に師事し、玄関番などを努めながら日本画を学びました。昭和6年に第12回帝展に初入選し、9年には出品作「港」が第15回帝展で特選になります。昭和11年京都市立絵画専門学校専科卒業。戦後は日展に出品し、22年特選、33年文部大臣賞受賞。京都学芸大学教授を経て47年より52年まで金沢美術工芸大学教授として後進の指導にあたられました。日本芸術院会員。日展常務理事。京都市文化功労者。京都府特別文化功労者。



あそ
阿蘇 紙 墨・鉛筆・ペン

にしやま ひでお
西山英雄 昭和44年(1911)~平成元年(1989)

昭和56年

各縦45.7cm 各横95.2cm

ミュージアムショップ通信

「私は、人と物との二様の師匠を持っている。人とは数え上げれば百人を下らないと思われる先生や先輩、同輩、知人たち。物とは大自然と古美術遺品のことである。物からは、心を空しくして己が五感を働かせて接した時、人からでは学び得ぬ深く高いものを教えられた。また大自然は常に私の師である。」(松田権六著『うるしのつや』より抜粋)

この言葉から「漆芸界の巨匠」「うるしの神様」とまでうたわれた松田権六の、自然や芸術に対する畏敬の思い、そして人としての謙虚な後ろ姿が見えてくるようです。またこの言葉の中に松田芸術の心が脈打っているようでもあります。

さて、いよいよ当館企画展「松田権六の世界」が開催になります。ショップでもこれに併せて本展示会の図録を販売いたします。ぜひこの機会に「松田権六の世界」を、展示会はもちろん御自宅でも堪能してください。定価は一冊2,000円です。



次回の展覧会

特別陳列 北陸の肖像画(第2展示室)

特集 名物裂と香道具
(前田育徳会展示室)

特集 石川の木彫
- 彫る・削る・磨く -
(第4展示室)

11月16日(木)~12月23日(日)

休館日:11月13日(月)~15日(水)

石川県立美術館だより 第276号

2006年10月1日発行

〒920-0963 金沢市出羽町2番1号

TEL 076(231)7580 FAX 076(224)9550

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>